

評価調査結果要約表

I. 案件の概要

- 国名：タイ王国
- 案件名：電気通信先端技術研修コース
- 分野：電気通信技術
- 援助形態：第三国集団研修
- 担当部局：JICAタイ事務所
- 協力金額：16,761,900タイバーツ
- 研修員一人当たりコスト：143,264タイバーツ
- 日本の貢献割合：80.0%
- 協力期間 (R/D)：1999年1月22日
開始：1998年度
終了：2002年度
- 先方関係機関：外務省 技術・経済協力局 (DTEC)
- 研修実施機関：モンクット王工科大学ラッカバン校 (KMITL)

1. プロジェクトの背景

電気通信技術の集団研修は、日本国政府とタイ王国政府の共同支援により1978年に始まった。この研修は主にアジア太平洋地域及びアフリカ地域の国々からの研修生を対象に実施した。技術・経済協力局 (DTEC) はモンクット王工科大学ラッカバン校 (KMITL) の工学部の過去の実績と十分な設備の利用可能性を踏まえ本研修の実施機関として選任した。

2. プロジェクトの概要

本研修コースは研修生に電気通信の先端技術を教授するものであり、またタイ王国における先端の電気通信システムに関する知識の提供も重要な役割である。研修は約7週間おこなわれ、英語を用いて実施された。1998年度から2002年度までの5年間で合計117人の研修生に及んだ。

(1) 研修プログラムのアウトプット

- 1) アウトプット1：研修生は最新の電気通信技術に関する知識を習得する。
- 2) アウトプット2：研修生は最新の光ファイバー、ISDN、デジタルスイッチングなどの最新の知識を習得する。
- 3) アウトプット3：研修生は電気通信に関する企画、設備の設置、運営維持管理などの監理技術に関する知識を習得する。
- 4) アウトプット4：研修生は電気通信に関するプロジェクトの実施、調整に必要な知識を習得する。

(2) 投入

- 日本側：13,384,940タイバーツ (80.0%)
相手国側：3,376,960タイバーツ (20.0%)

II. 評価調査団の概要

評価調査団

斉藤淳、プラシット・パタナキリパイブン、チャソパ・クリンブン、岡本純子、小笠原未歩子
調査期間：2004年1月21日～2004年3月31日 (2003年度)
評価種類：終了時評価

III. 評価の結果

1. 研修プログラムの達成度

研修コースの達成度を計るため、KMITLが研修生に対しコース終了時にアンケート調査を実施している。この結果では研修生のほとんどがコースに対し満足しており、高く評価していることが読み取れる。この観点からすると研修プログラムは内容、運営ともに高水準であったと言えることができる。

2. 評価結果

(1) アウトプットの達成度の分析

電気通信先端技術研修は、全般的な観点から当初設定したアウトプット達成度は非常に高いと評価できる。調査によると、研修生は現在も自国で電気通信関連の職務において、研修で習得した技術を用いて業務にあたっている。また、研修で習得した知識は研修生だけでなく、その他の職員や関係者にも技術移転され、活用されている。

(2) 妥当性の分析

電気通信先端技術における第三国研修は研修参加国のニーズや政策に対応した内容になっている。通信分野は途上国においても最も成長著しい分野であり、この成長は途上国の経済活性化や国民の利便性の向上に貢献するものである。このような観点から、本研修はニーズに対応したコース内容であり、具体的かつ最先端の技術を提供している。コースでは、基礎的な科学知識、実務知識、最新の通信技術、通信分野のプロジェクトの企画、装置設置、維持管理、運営といった知識が研修されている。

3. 研修プログラムの促進要因

この研修を成功に導いた要因として以下の五つの要因が挙げられる。

- 経験豊かな実施機関による水準の高い研修の実施。
- 研修生の要請に応じたカリキュラム内容。
- DTECやKMITLによる研修生の適切な資格審査の実施。
- 研修コースの適切な「アウトプット」設定。
- JICA、DTEC、KMITL及び研修生など関係機関（者）の協力関係。

4. 研修プログラムの阻害要因

研修プログラムの阻害要因として2点を指摘することができる。第1は、コースプログラムが多岐に亘りすぎていることである。多くの内容を扱う必要があるため、時間的制約の中で研修内容が研修生の期待したレベルまで到達していないとの意見が多く聞かれた。

第2は、研修参加国の通信基盤整備のレベルが大きく異なっていることから、研修生のレベルにも格差が見られ、研修のターゲットが的確に絞りきれない点である。たとえば最新技術の知識を習得しても帰国後習得した知識を使う段階に至っていないという声もあった。

5. 結論

本コースは研修コースとしてよく整備されており、ほとんどの研修生が高い評価を示している。同様にKMLTLも研修生の習得度の高さを確認しており、DTECや研修参加国からの評判も高い。また、多くの研修生は帰国後も電気通信分野に携わっており、その意味では各々の国の通信技術向上に一定の貢献があったと言えることができる。しかしながら、自国の通信基盤のレベルによっては、コースで研修した内容を十分に発揮する機会が限られている研修生がいることも事実である。

6. 提言

本コースは研修参加国からも未だ要望が高く、またKMITLの研修の実施成果も評価されている。したがって、このコースは今後とも継続するべきものとする。

タイ王国に対する提言

- 研修参加国の現況やニーズの調査
- 研修目的やカリキュラム内容の見直し
- 上級研修コースの提供
- 研修後の研修生に対する評価及びモニタリングの実施

JICAに対する提言

- インターネットを利用した追跡調査及びモニタリングのためのシステムの確立

7. 教訓

本研修を通じて、以下の事柄の重要性を教訓として学ぶことができた。

- 研修実施機関の協力体制とスタッフの人材育成
- より限定した課題に対する研修コースの提供
- タイ王国政府およびJICAによる技術供与及び経済的援助の必要性
- 研修実施機関と研修参加国との連携
- プログラム全体における活動時間のバランスの適性